

インドからのたより

高島 淳

皆様お元気でお過ごしのことと思います。

先日は、草作りに追われて予餞会に欠席いたし失礼いたしました。小生は無事3月27日にマドラスに着き、はや十日が過ぎようとしています。大学の手続き等はほぼ終り、一両日中に本来の目的地たるPondichery (160kmほど南)へ出発の予定です。

ところで32才にして初体験のインドですが、耳年増の悲しさか、フランス体験が前にあるせいか、こんなものかな、というのが実感です。もちろん、文部省のおかげである程度金に余裕があり、Air Conのホテルに泊まっていたりするので上の方しか基本的には見ていないのですが、街を歩けば乞食とかスラムとかはいやでも目に入ってきます。しかし、そういうことに単純にショックを受けるのは余りに想像力のない人のすることではないでしょうか。今の日本の輸出入が全てストップすれば更にひどい状態になることは確かで、僕の目にはそうしたvisionが重なって浮きでてくるだけです。という訳で、僕はインドに対して、拒絶反応も熱狂的思い入れも、どちらも、思っていたように、しないだろうなということです。でも皆様のためにいくつかの点描を試みましようか。

①普通の人には、やはり空港から外に出るだけでショックでしょう。税関の申告を終えて、夜中の12時すぎに外に出ると200人ぐらい

の人が出口を取りまいているのです。もちろん大部分は親族の出てくるのを待っているだけです。先頭の数人は呼びもしないのにポーター役をしてチップをもらおうという連中で、その騒しさにはともかく一瞬圧倒されそうになります。夜中に、何やらわからないことを叫んでいる人の群れの唯中を抜けて歩いていくのはちょっとしたものです。

②マドラスは一見すると本当に田舎の感じですが。中心部ですら3階以上のビルはぼつりぼつりとあるだけで(カルカッタ、ボンベイ等とはくらべるべくもなく(伝聞)),牛も多く田園都市といった様子。しかしそうした外見の底の厚みは、旧市街を観察していると見えてきます。例えば、薬局や化学薬品を扱う店が何十軒と並ぶ通りを歩くと、気軽に酸化チタンなどというハイテク顔料を扱っていたり、電気街は昔の秋葉原を思わせたり(もっともインドらしく余り専門化が見られないが)、先端技術と底辺の乖離とよく言われることが、それほどでもないことを感じさせてくれます。

そのうち宗教心についてもレポートできることと思いますが、とりあえずこんなところで、皆様お元気で。(1987年4月7日)